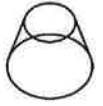


静岡市美術館開館記念展<III>



棟方志功

祈りと 旅

平成23年2月11日(金・祝)
- 3月27日(日)



棟方志功 「華狩塚板置圖 (はなかりしょうはんへきが)」
昭和29 (1954) 年 紙本・木版墨摺 棟方板画美術館蔵

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：青木・小川 広報担当：鈴木・青木

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp

Aoi Tower 3F, 17-1, Kouya-machi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

2010年5月、静岡駅北口に開館した静岡市美術館は、10月2日にグランドオープン致しました。このたび、静岡市美術館開館記念展〈Ⅲ〉として、「棟方志功 むなかたしこう 祈りと旅」展を開催致します。

棟方志功は、「版画」を「はんが板画」と称し、従来の常識にとらわれない、奔放なエネルギーに満ちた大型の作を次々と発表した、日本を代表する木版画家です。戦前より評価を高め、1955年のサンパウロ・ビエンナーレ、1956年のヴェネツィア・ビエンナーレでは日本人初の版画部門最高賞を受賞し、1975年に72歳で天寿を全うするまで、旺盛な創作活動を続けました。

本展では没後35周年を迎えるにあたって、「祈りと旅」をテーマに、棟方の足跡を約330点の作品でご紹介します。サンパウロ、ヴェネツィアで受賞した「にぼさつしやかじゅうだいでし二菩薩釈迦十大弟子」や、全長26mに及ぶ大作「大世界の柵」を始めとした代表作を網羅するとともに、文学や女性を主題にした作品や、静岡市出身の工芸家・せりざわけいすけ芹沢銈介も加わった民芸運動とゆかりの深い作品をご紹介します。

また、棟方は晩年に日本各地を旅行し、風景を題材に「海道シリーズ」を制作しました。静岡も描いた「とうかいどうむなかたはんが東海道棟方板画」と併せて、それらを一挙公開します。

板画を創作の中心に据えながら、自ら「やまとえ倭絵」と命名した肉筆画や、油彩画、書、陶磁器など、幅広い造形活動を展開した棟方志功。その生涯にわたる芸業をどうぞお楽しみ下さい。

— 展覧会構成 —

- | | |
|-----|------------|
| 第1部 | 祈り |
| 第2部 | 津軽 |
| 第3部 | 旅と文学 |
| 第4部 | 文人画家の多彩な芸業 |

— 開催概要 —

■開催期間

平成23年2月11日（金・祝）～平成23年3月27日（日）

* 休館日／毎週月曜日、ただし3月21日（月・祝）は開館、翌22日（火）は休館

■開館時間 10：00～19：00（展示室入場は閉館30分前まで）

■観覧料

一般1,000円（800円）／大高生・市内70歳以上600円（400円）

中学生以下無料

*（ ）内は前売および20名以上の団体料金

* 障害者手帳等をご持参の方および介助者1名は無料

■前売券 12月18日（土）～2月10日（木）販売

静岡市美術館、チケットぴあ〔Pコード：764-435〕、ローソンチケット

〔47673〕、谷島屋呉服町本店、戸田書店静岡本店、戸田書店清水本店、

戸田書店城北店、江崎書店パルシェ店

主 催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者（財）静岡市文化振興財団、静岡朝日テレビ、朝日新聞社

後 援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会

特別協賛： **ほご3モフーズ**

協 力：（財）棟方板画館、（株）安川電機

監 修：棟方板画美術館

第1部

祈り



「華巖譜」より「風神の柵」
昭和11（1936）年/昭和13（1938）年 棟方板画美術館

- ① 最初期の油彩画を起点に、棟方の生涯にわたる制作の変遷を、「二菩薩釈迦十大弟子」を始めとする代表作でたどることができる。
- ② 「大和し美し」「華巖譜」「善知鳥板画卷」など、民芸運動と関わりのある作品を紹介。
- ③ 全長26メートルにもおよぶ大作「大世界の柵」を公開。

第1部では、青森で画家への道を模索していた大正末期の油彩画作品から、昭和38（1963）年に倉敷国際ホテルのために制作した大作「大世界の柵」まで、^{はんが}板画に目覚め、作家として認められてゆく転機となった代表作により、棟方の創作の軌跡をたどる。

棟方は、雑誌『白樺』に掲載されたゴッホの《ひまわり》に触発され、独学で油彩画を学び、帝展入選を目指して大正13（1924）年に上京する。相次ぐ落選で苦闘の日々を送るなか、川上澄生^{かわかすみお}の木版画「初夏の風」^{はつなつ}を見て木版画の魅力を知る。昭和3（1928）年に油彩画^{ざつえん}《雑園》で念願の帝展入選を果たすも、棟方の目指す道は次第に版画へと定まっていた。昭和11（1936）年に「大和し美し」で民芸運動の中心的存在であった柳宗悦に見出されると、民芸運動の面々から仏教や古典の主題、経済的援助を得て、版画家として一層の成長を遂げてゆく。昭和13（1938）年には「勝鬘^{しょうまん}譜善知鳥^{ふとうはんがまんだら}版画曼荼羅^{うとうはんがかん}（本展では「善知鳥板画卷」として展示）」で、官展で版画初の特選を得る。戦後は様々な主題に挑み、棟方独特の作品を生み出し続けた。また、サンパウロ・ビエンナーレ、ヴェネツィア・ビエンナーレなどの国際展にて、日本人初の版画部門大賞を受賞し、国際舞台でも名が知られることとなった。折しもテレビ時代の到来を迎えるなか、棟方の個性的な人間像が大衆的な人気を集め、作家と作品は、日本人にとって最も身近な芸術家のひとりとして認知されてゆく。

棟方は自らの「版画」を「板画」と呼び、^{さく}「柵」という字で表した。彼は、板の声を聞き、木の魂をじかに生み出すのが「板画」であり、自分の手が生み出すのではなく、板画の方からひとりでの作品になっていくのだと考えていた。「柵」とは、棟方によると四国の巡礼が寺に納める札のことで、「一柵ずつ、一生の間、生涯の道標を一つずつ、そこへ置いていく、作品に念願をかけて置いていく、柵を打っていく。」という思いを表したものである。

第1部 祈り



「二菩薩釈迦十大弟子」

昭和14（1939）年/昭和23（1948）年一部改刻/昭和42（1967）年摺
紙本・木版墨摺 屏風六曲一双 棟方板画美術館蔵



「弁財天妃（べんざいてんひ）の柵」

昭和40（1965）年/昭和49（1974）年
紙本・木版墨摺彩色 棟方板画美術館蔵

「柳緑花紅頌（りゅうりよくかこうしょう）」より 「侘助の柵（11月）」

昭和30（1955）年/昭和33（1958）年
紙本・木版墨摺 屏風六曲一隻 棟方板画美術館蔵



「鐘溪頌（しょうけいしょう）」より

「若栗の柵」

昭和20（1945）年/昭和44（1969）年
紙本・木版墨摺彩色 屏風六曲一双 棟方板画美術館蔵

第2部

津 軽



「恐山の柵」
昭和38（1963）年 棟方板画美術館蔵

- ① 棟方の故郷であり、晩年の主要なテーマとなった「青森」を題材にした作品を、造形的、色彩的特徴を作品から展観する。
- ② 棟方が晩年までアトリエで愛蔵した「飛神の柵（御志羅の柵）」を紹介。

棟方の画業のなかで、生まれ故郷である青森の歴史や民話をもとにした作品は、大きく2つの時期に分かれる。昭和10年代初頭の「東北経鬼門譜」^{とうほくきょうきもんぷ}「善知鳥板画卷」^{うとうはんがかん}など戦前の作品と、昭和36（1961）年の「花矢の柵」^{はなや}以降に発表された作品である。第二部では後者のなかから「恐山の柵」「飛神の柵（御志羅の柵）」^{おしら}「東北風の柵」^{やませ}などを中心に紹介する。棟方は青森について、以下のように述べている。

「百姓は苦勞して仕事をして、わずかの収穫しか得られず、夏あたりから寒い風が吹いて、いつも凶作ばかり、豊作という言葉は聞いたことのない土地に生まれました。易の方でも東北を指して鬼門と言います。」

（棟方志功「東北経鬼門譜」『板画の道』昭和31年）

「おれは日本で生まれた。日本も青森の東北風の吹く凶作の地だ。東北は日本の鬼門だというけれど、おれは鬼門をひらいていかなくちゃだめだとおもったの」

（飯沢匡「遠近問答47棟方志功」『週刊朝日』昭和45年）

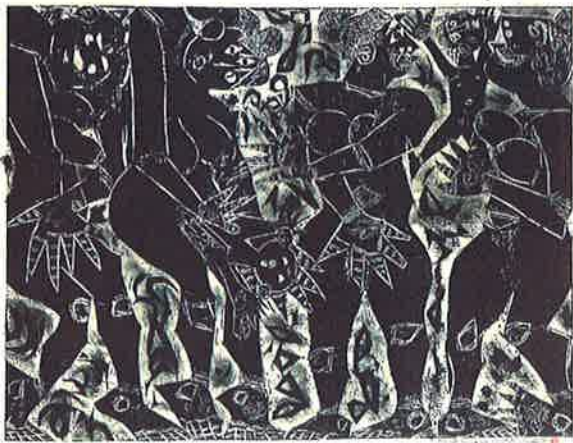
大正13（1924）年、21歳で上京して以来、旅行者として訪ねることはあっても、決して帰ることのなかった青森は、棟方が常に想い慕う土地であった。青森を題材にした戦後の作品は、そうした想いを反映するかのよう、瞳のない眼、尖った指先、グローブのように大きい手、直線を多用したデフォルメされた身体、といった特徴を持つ、荒々しい女性像が共通して登場する。

同じくご紹介する「金太郎・桃太郎図屏風」や「青森風絵」は、棟方自身が自らの色彩の原点と語る、ねぶた祭り^{やまとえ}で登場する勇壮な武者絵を彷彿とさせる。棟方は「倭絵」と命名した肉筆画、および板画において、ねぶた祭りで使用するものと同様の絵具を多用した。棟方自身「このネプタの色、これこそ絶対まじりけのないわたくしの色彩でもあります」（棟方志功『板極道』昭和39年）と述べるように、強い色彩は祭りの華やかさを思い起こさせ、また棟方独特の色彩として、強く印象付けられる。

第2部 津軽



とびがみ おしら
「飛神の柵（御志羅の柵）」
昭和43（1968）年 紙本・木版墨摺彩色 棟方板画美術館蔵



「津軽海峡の柵」
昭和40（1965）年
紙本・木版墨摺 棟方板画美術館蔵



「青森風絵」
昭和46（1971）年
倭絵（紙本・彩色） 棟方板画美術館蔵

第3部

旅と文学



「東海道棟方板画」より「清水 港慕色（みなとぼしよく）の柵」
昭和38（1963）年 棟方板画美術館蔵

- ① 谷崎潤一郎の連載小説「鍵」の挿絵「かぎはながさく鍵板画柵」、草野心平の詩をもとに制作した「ふがくしょう富嶽頌」など、棟方と文学の関わりをさぐる。
- ② 「現代の東海道五十三次」として制作された「とうかいどうむなかたはんが東海道棟方板画」より、「静岡」「清水」「丸子」「興津」「蒲原」「由比」の六宿を紹介。
- ③ 昭和45（1970）年から没する前年の昭和49（1974）年まで、毎年制作された「海道シリーズ」を一挙公開。

第3部では、文学を主題にした作品や小説の挿絵を紹介する。また、昭和38（1962）年から39（1963）年にかけて、東海道を写生旅行したのち板画にした「東海道棟方板画」、ならびに昭和45（1970）年以降に毎年制作された「かいどう海道シリーズ」を公開する。

棟方作品の重要な特徴として、文学との関わりがある。柳宗悦と出会って以後、棟方は神話や伝説から制作の題材を得ているが、同時代の文学者、詩人とも多く交わり、文学作品に靈感を得た作品を残した。代表的な作家として、岡本かの子、吉井勇、谷崎潤一郎、草野心平が挙げられる。ここでは谷崎潤一郎の『鍵』に寄せた挿絵「鍵板画柵」や、草野心平が詩を作り棟方が絵を担当した「富嶽頌」などを中心に紹介する。

また、「現代の東海道五十三次」として制作した「東海道棟方板画」、それに続き制作した「海道シリーズ」を一挙公開する。棟方は、「東海道棟方板画」を制作した60歳になるまで、油彩画は写生するものの、板画で風景を写生したことがほとんどなかった。また具象を板画で表すことはあっても、それは直接ものを写し取った作品でないことが大半である。「東海道棟方板画」は全編写生を元に制作したほぼ初めての板画作品である。かつて東海道を版画に表した葛飾北斎、歌川広重などの先人を意識しつつも「人間の暮らしという大きな土台から、景色をとおして現代のバックボーンになっている新しい東海道の姿をとらえる」（『国際写真情報』昭和39年）と語るように、自分の中に見る風景を板画にした。特に今回は、「静岡」「清水」「丸子」「興津」「蒲原」「由比」など、「世界のムナカタ」が描く静岡市の六宿の風景を楽しむことができる。

「海道シリーズ」は昭和45（1970）年の「さいかいどうむなかたはんが西海道棟方板画」を皮切りに、没する前年の昭和49（1974）年「うかいどうむなかたはんが羽海道棟方板画」まで毎年制作された。旅先の情景のみならず、棟方を通して映し出される土地の雰囲気、文化を見ることができる。

第3部 旅と文学



かぎはんがさく おおめがね
「鍵板画柵」より「大鏡の柵」
 昭和31（1956）年 紙本・木版墨摺
 屏風二曲一隻 棟方板画美術館蔵



りゅうりしょう ししくつ
「流離抄」より「獅子窟の柵」
 昭和28（1953）年
 紙本・木版墨摺彩色 屏風二曲一双
 棟方板画美術館蔵



たにざきうたうたはんがさく わぎも
「谷崎歌々板画柵」より「吾妹の柵」
 昭和31（1956）年
 紙本・木版墨摺彩色 屏風二曲一双
 棟方板画美術館蔵



ゆきぶたい
「東海道棟方板画」より「京都 雪舞台の柵」
 昭和38～39（1963～64）年
 紙本木版墨摺彩色 棟方板画美術館蔵



さいかいどうむなかたはんがさく
「西海道棟方板画」より「4月 福岡 宗像宮神樹の柵」
 昭和45（1970）年
 紙本・木版墨摺彩色 棟方板画美術館蔵

第4部

文人画家の多彩な芸業



こずもつかしろう
「胡須母寿花頌」
昭和49（1974）年 倭絵（絹本・彩色） 棟方板画美術館蔵

- ① 倭絵（肉筆画）、油彩画、書、陶磁器など多彩なジャンルの作品を紹介。
- ② 民芸運動の作家である河井寛次郎、浜田庄司らとの交友を示す作品を公開。
- ③ 『なめとこ山の熊』『雨ニモマケズ』などの、宮沢賢治の作品を主題にした作品を展示。
- ④ 展覧会初出となる小説、雑誌の挿絵を出品。

第4部では、他の芸術家たちとの交友資料をはじめ、棟方の多岐にわたる創作活動を紹介する。

棟方は昭和11（1936）年の「大和し美し」による柳宗悦との出会いを契機に、民芸運動の面々と交わった。グループの年長者の中でも、棟方は柳のほかにかわいかんじろう、はまだしょうじ、河井寛次郎、浜田庄司を師と仰ぎ、創作の刺激を受けた。本展では棟方が常にアトリエに置いて愛蔵した、河井や浜田の茶碗、花器を紹介する。

多くの作家と交わる中で、棟方は同じ東北出身の文学者、宮沢賢治とも関わりを持った。まだ民芸の面々と出会う以前、若き棟方は同時代の文学者や詩人の本の装丁、挿絵を制作していた。賢治とは面識はなかったが、共通の知人を通して、生前に出版された数少ない作品のひとつ『グスコブドリの伝記』に挿絵を制作した。賢治作品を愛読した棟方は、『なめとこ山の熊』や『雨ニモマケズ』を板画にした。特に後者は、好んで制作した作品のひとつである。

棟方は板画と並行して幅広い造形活動を展開した。自ら「倭絵」と命名した肉筆画や、油彩画、書、陶磁器などである。昭和27（1952）年には、それらを紹介する「第一回棟方志功芸業展」を開催した。この「芸業」という言葉について、棟方は以下のように語っている。「芸業展ということばを使った意味は、板画と倭絵と、それから書、油絵とそれぞれ違った表現のものの中に、わたくしの芸術の願望を、それぞれの深さとか幅とかを見出したいと思ったからです。」（棟方志功『板極道』昭和39年）もともと油彩画を創作の出発点とした棟方は、板画を創作の中心に据えた後も、様々な分野で自分の理想とするかたちを探った。この展覧会は、最晩年の昭和50（1975）年まで毎年開催された。

多様なジャンルにわたる作品群を俯瞰すると、板画と同様のモチーフや、荒々しい表現が共通して表れている。棟方は書について「書かれる気韻を土台にして生動するものを見せたい」（『板極道』）と述べているが、これは書に限らず、棟方の創作行為全般にかかる特徴のひとつであろう。素早く力強い筆致で描かれた作品から、どんなジャンルでも果敢に挑む棟方の気迫を感じさせる。

第4部 文人画家の多彩な芸業



じはんぞう くろいた
「自板像 黒板の柵」
 昭和46（1971）年/昭和48（1973）年
 紙本・木版墨摺 棟方板画美術館蔵



ふうぜんしやう
「富士山図・風然頌」
 昭和41（1966）年
 倭絵（紙本・墨画金泥）
 棟方板画美術館蔵



こずかたはんがさく
「不来方板画柵 詩：宮沢賢治」
 より**「雨ニモマケズの柵」**
 昭和27（1952）年
 紙本・木版墨摺 2柵
 棟方板画美術館蔵



こうじん
「小説『行人』挿絵 小説：夏目漱石」
※展覧会初出品
 昭和47（1972）年 倭絵（紙本・彩色）
 全16図のうち5図を展示
 棟方板画美術館蔵



「雑誌『ミセス』挿絵 詩：草野心平」 より
「紅梅図」 ※展覧会初出品
 昭和49（1974）年 倭絵（紙本・彩色）
 全12図のうち4図を展示
 棟方板画美術館蔵



せいたいにつこう
「青苔日厚」 昭和34（1959）年
 紙本墨書 棟方板画美術館蔵

会期中イベント

※申し込みは1件につき2名様まで。(⑤を除く)

※往復はがきへの記載事項

①催事名、催事日 ②氏名(参加人数分) ③年齢④住所(郵便番号から) ⑤電話番号
返信面に宛先を記入のうえ静岡市美術館まで。

① はZ36フーズ プレゼンツ

講演会「棟方志功の日本、世界のムナカタ」

日 時：2月11日(金・祝)13:30-15:00(開場13:00)

講 師：滝沢恭司氏たきざわきょうじ(町田市立国際版画美術館 学芸員)

会 場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料

定 員：100名(応募多数の場合は抽選)

申 込：HP申込フォームまたは往復はがきにて【1月26日(水)必着】[※]

② 講演会「芹沢銈介と棟方志功について」

日 時：2月26日(土)13:30-15:00(開場13:00)

講 師：白鳥誠一郎氏しらとりせいいちろう(静岡市立芹沢銈介美術館 学芸員)

会 場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料

定 員：100名(応募多数の場合は抽選)

申 込：HP申込フォームまたは往復はがきにて【2月10日(木)必着】[※]

③ ギャラリーツアー&声明コンサート

「仏の教え・祈りの歌ー「二菩薩釈迦十大弟子」に導かれて」 にぼさつしゃかじゅうだいでし

学芸員とともに展示室で作品を鑑賞したのち、閉館後の展示室にて、棟方の代表作「二菩薩釈迦十大弟子」の前で、「天台聲明七聲會」てんたいしょうみょうしちせいがいによる声明をお楽しみ頂きます。

日 時：3月4日(金)18:30-20:00(受付開始は18:00)

出 演：天台聲明七聲會(末廣正栄・室生述成・林尚順)

会 場：静岡市美術館 展示室

参加料：1,500円(観覧料含む)

定 員：60名(応募多数の場合は抽選)

申 込：HP申込フォームまたは往復はがきにて【2月15日(火)必着】[※]

会期中イベント

④朗読会

「SPAC俳優とたどる、朗読・棟方志功」

学芸員とともに展示室で作品を鑑賞したのち、SPAC俳優による朗読会をお楽しみ頂きます。

日 時：3月11日（金）18：30－20：00（受付開始は18：00）

演 出：おおおがじゆん大岡淳 出 演：おくのあきひと奥野晃士（ともにSPAC-静岡県舞台芸術センター）

会 場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料（要展覧会チケット）

定 員：60名（応募多数の場合は抽選）

申 込：HP申込フォームまたは往復はがき[※]にて【2月25日（金）必着】

⑤学芸員による展示解説

日 時：2月13日（日）、3月19日（土）13：30－14：30

参加料：無料（要展覧会チケット）

対 象：どなたでも

申込不要（当日インフォメーション前にお集まり下さい）

静岡市美術館、2010年5月1日開館



文化商業施設が集まる静岡駅前に、店舗、レストラン、オフィスが入った静岡市一の高さを誇る「葵タワー」が2010年4月1日にオープンしました。その葵タワーの3階に静岡市立の美術館として新しく静岡市美術館が開館しました。

基本理念は「人・地域が躍動する芸術文化の創造・発信」です。

基本方針

- ・しずおかの歴史や風土、伝統的文化を継承しながら、新しい「しずおか文化」を創造し、世界に向けて発信します。
- ・美術を主軸にデザインや工芸等、幅広いジャンルの展覧会をバランスよく実施します。
- ・街にひらかれた「芸術文化の交流拠点」を目指します。
- ・子どもからお年寄りまで、みんなが集う、“いきいきした美術館”を目指します。

活動の柱は、年間を通じた企画展事業です。展示室は広さ約1,100㎡、天井高4,1~4,5mと十分な広さを持ち、国宝や重要文化財等、国指定文化財も展示できるよう設計されています。美術を主軸にデザインや工芸等、幅広いジャンルの展覧会をバランスよく実施します。

また、エントランスホールや多目的室、ワークショップ室を「交流ゾーン」と位置づけ、同時代のアートシーンの紹介や、コンサート、講演会、ワークショップ等、様々な交流ゾーン事業を実施します。初めて美術館を訪れる方から熱心な美術ファンまで、また美術館の将来を担う子ども達からお年寄りまで、誰もが気軽に立ち寄れる“ちょっと面白い、街の中の広場”としての都市型美術館をめざします。開館時間は午前10時から午後7時までです。仕事帰りや買い物ついでにもご覧頂けます。

静岡市美術館



アクセス

《電車》 JR静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分
静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

《新幹線》東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

《車》 東名静岡ICより約15分
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

《空路》 富士山静岡空港より静鉄バス
(静岡エアポートライナー)で約1時間

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
Aoi Tower 3F, 17-1, Kouya-machi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN
tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：青木・小川 広報担当：青木・鈴木
tel. 054-273-1515 (代表) Info@shizubi.jp

